

狐穴を探せ

6月からシビルで続けてきた古文書講座では、元一中の国語の教員であったIさんを講師に、玉川上水、品川分水の盗水訴訟事件の文書を読んできました。品川分水（品川用水）は、玉川上水を境村（武蔵境）で分水し、現在の三鷹市内、世田谷区内を流れ、品川地域に達する28kmに及ぶ水路です。こうした長い分水は、台地の尾根筋（高いところ）を流します。一度でも低い谷に落ちたら水は二度と上れないからです。



つまり、世田谷では、日照りの時など、そこを流れる水はまさに「喉から手が出る」くらいほしかったはず。高いところを流れる用水の水は、水路の土手を壊せば、水を引き込むことができるのです。嘉永5（1852）年、世田谷・横根村で、土手に穴を開けて水を盗んだため、下流の田んぼに水が来ない、と用水を使う権利を持つ品川領の大井村他8ヶ村が、世田谷の村をお上に（品川の村々は幕領なので、幕府代官齊藤氏に）訴えます。

それに対して、世田谷側は、あれは「狐穴」と苦しい言い訳、でもさすがにそれでは通せず「無筆愚昧もの故、御高札の面をも弁え」ない伝次郎が、狐穴のワキを掘ってしまった、以後させないので、訴えを取り下げしてほしい、といった内容の文書でした。

その文書を4回の講座で読み終えた後、OP ツアーで、この盗水事件の狐穴を探しに出かけました。先行研究と地形が頼り。このあたりでは水路の跡は、千歳通りになっていて、やはり高いところを通過していたことが分かります。



土手をきって水を流すとすれば、田んぼのある谷戸（谷）が迫る所なはず。地図を見ると、千歳船橋駅の南に川の痕跡が、明治の地図でもその辺りが田んぼになっていたようです。とすれば、その谷を上り詰めたところ、ということで、この路地が狐穴と決定。



実は、この地は桜田門外の変 1860 で暗殺される大老井伊直弼を出す彦根藩領、ということで井伊家の代官大場家の代官屋敷が残っています。そして、その大場家もこの盗水事件の裁判に「掃部頭御家来」として登場します。その代官屋敷でこのツアーも終了しました。